

【書評】

田中史郎著『社会科の史的探求』

(西日本法規出版, 1999)3429円

岩田一彦  
(兵庫教育大学)

本書は田中史郎岡山大学教授が退官に際して、研究成果の一端として出版されたものである。社会科教育・歴史教育研究者として、第一線で活躍されてきた先生の足跡が明示されている書である。

社会科の解体による、地理歴史科、公民科、生活科の誕生、また、総合的な学習の時間の設定など、社会科の周辺は波立っている。このような時期こそ、教育の場における社会認識形成の歴史を、理論及び実践の両面において、分析検討することが求められている。

本書は、この時期の社会科を原点から考える論文を提示している。本書の構成とその研究課題は次の通りである。

I 近代歴史科史

「読書としての歴史」から教科としての固有の教育的役割を担う歴史科の自立過程の究明

II 近代歴史教育論史

近代成立期における歴史教育論を取り上げ、歴史観・歴史学との関連において分析考察

III 社会科前史

生活教育及び郷土教育の理論と実践を「社会科教育史」の観点から考察

IV 社会科史

昭和40年代の特徴を示す社会科の「理論—実践」として、科学的概念・法則を教える授業、子どもの思考力を育てる授業、子どもたちが社会生活の問題を追求する授業、地域に根ざす授業、を取り上げその特質と意義を考察

V 補論—理論研究—

科学的認識形成における批判的資料意識、歴史的認識とイマジネーションの関係構造と特質、「自立」に関わる社会認識形成、の考察

本書では、次のような課題が解明され、社会科教育における研究の方向性が示された。

近代歴史科史においては、「史学即歴史科観、史学入門的読書の歴史科観」からの脱却が、普通教育の教科の位置にある歴史科には求められる。それは、教則大綱において教科構造的性が示されたことによって獲得されたことが明らかにされた。また、その構造は、「国体倫理主義の歴史科」と「歴史学の学問性・系統性」の矛盾をも持ち込んだものであった。

近代歴史教育論史においては、三宅米吉の歴史教育論が分析され、社会認識教育としての内容を備えていたことが解明されている。三宅の歴史教育論には、①「社会全体」「人民」をも対象とした歴史、②人類開進の大道社会変遷の法則の稽查発見の学、③社会学の原理による歴史現象の因果関係の解明、④政府からの歴史学の自立性、の4本の柱が存在していたことを明らかにしている。

また、津田左右吉の「国民」形成としての日本史独立論の考察は、社会認識形成と社会科・歴史学等の諸科学との関係を考えていく原点を示したものである。

社会科史においては、①「現実」「認識」とはどんなことか、②なぜ社会科は子どもの現実認識を課題とするのか、③これらの課題は社会科理論の中でどのような位置を占めるのか、との問題意識のもとで、その解答を代表的実践の中に求め、解明している。

一部のみを取り上げて、研究成果の一端を示した。田中氏は、本書の最後で「研究の自立は『孤立』ではない。今改めて教科教育学と教科内容諸科学、教育学、心理学の関わりが、それぞれの担い手の共同の課題として『実践学』構築に向けて求められているのではないだろうか。」と述べ、実践学構築への想いで締めくくっている。

社会科教育研究を志す諸氏に薦めたい書である。